

主な感染症一覧

本一覧表は、学校保健安全法施行規則及び2018年改訂版保育所における感染症対策ガイドライン(厚生労働省2018(平成30)年3月)における出席停止期間の基準を参考に、堺市医師会と協議し作成したものです。児童によっては症状が異なることがありますので、主治医に相談してください。

医師が記入した意見書が必要な感染症

病名	症状	病原体	潜伏期間	感染経路	感染期間	免疫	自宅療養の目安
麻疹(はしか)	発症初期には高熱、咳、鼻水、結膜充血等がみられる。発熱が一時低下傾向となるが再び上昇し、この頃口腔内に白い斑點(コプリック斑)が出現する。その後顔や頸部に発疹が出現する。	麻疹ウイルス	8～12日(7～18日)	主に飛沫感染、接触感染及び空気感染(飛沫核感染)。感染力は非常に強く、免疫がない場合はほぼ100%の人が感染する	発熱出現1～2日前から発疹出現後4日まで	終生	解熱した後3日を経過するまで
風しん(はしか)	発疹が顔や頸部に出現し、全身へ拡大する。風しんは約3日で消え、発熱やリンパ節腫脹を伴うことが多い。悪寒、倦怠感、眼球結膜充血等を伴うこともある。	風しんウイルス	16～18日(14～23日)	主に飛沫感染であるが、接触感染することもある	発疹出現7日前から発疹出現後7日まで	終生	発疹が消失するまで
水ぼうそう	発疹が顔や頸部に出現し、やがて全身へ拡大する。発疹は、斑丘疹の赤い丘疹から始まり、水泡(水ぶくれ)となり、最後は痂皮(かさぶた)となる。	水痘・帯状痂しんウイルス	14～16日(10日未満や21日程度になる場合もある)	気道から排出されたウイルスによる飛沫感染又は空気感染による水痘中にはウイルスが胞子の状態で接触感染もする	発疹出現1～2日前から、すべての発疹が痂皮(かさぶた)化するまで	終生	全ての発疹が痂皮(かさぶた)化になるまで
帯状痂しん	過去に水痘(水ぼうそう)に感染し、免疫能の低下等をきっかけとして、小水疱が神経の走行に沿った形で、身体の片側に発症することがある。	水痘・帯状痂しんウイルス	不定	一度水痘に罹患するとウイルスを神経節に持っている状態で帯状痂しんを発症する可能性がある	発疹出現後7日前から、すべての発疹が痂皮(かさぶた)化になるまで	再発することもある	全ての発疹が痂皮(かさぶた)化になるまで
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	発熱と唾液腺(耳下腺、顎下腺、舌下腺)の腫脹・疼痛で、発熱を伴い唾液腺の腫脹は片側に腫脹したあと反対側が腫脹することが多い。腫脹部位に疼痛があり、唾液の分泌により痛みが増す。	ムンプスウイルス	16～18日(12～25日)	唾液を介した飛沫感染又は接触感染	発熱1日前から3日目まで(1週間程度)で感染力は著しく弱くなる	終生	耳下腺、顎下腺、舌下腺の腫脹が発現してから5日、かつ全身状態が良好になるまで
百日咳	特有な咳(コンココと咳込んだ後、ヒューという音を吹くような音を立てて息を吸う)が特徴で、連続性・発作性の咳が長期に続く。	百日咳菌	7～10日(5～12日)	主に飛沫感染及び接触感染	咳が出現してから4週目まで	終生	特有の咳が消失するまで又は5日間の適正な抗菌薬による治療を終了するまで
インフルエンザ	突然の高熱が出現し、3～4日続く。全身症状(倦怠感、食欲不振、関節痛等)や気道症状(咽頭痛、鼻汁、咳等)を伴う。	インフルエンザウイルス	1～4日(平均2日)	主に飛沫感染及び接触感染	発熱1日前から3日目をピークとし7日程度まで(近年幼児では長引くという報告あり)	再感染あり	発熱、充血等の主な症状が消失した後2日を経過するまで
咽頭結核熱(チール熱)	高熱、咽頭痛、頭痛、食欲不振を訴え、これらの症状が3～7日続く。その他、扁桃腺炎、結膜炎などがある。	チネチアウイルス	2～14日	主に飛沫感染及び接触感染	咽頭から2週間、糞便からは数週間排泄される	再発することもある	医師により感染のおそれがないと認められるまで
腸管出血性大腸菌感染症(O157、O26、O111等)	無症状の場合もあるが、多くの場合には、水溶性下痢便や腹痛、血便がみられる。溶血性尿毒症候群を合併し、重症化する場合がある。	ベロ毒素を産生する大腸菌(O157、O26、O111など)	ほとんどの大腸菌が10時間～6日。O157は3～4日	主に、菌に汚染された生肉や加熱が不十分な肉、菌が付着した飲食物からの経口感染。接触感染(患者や保菌者の便からの二次感染もある)	便中に菌が排泄されている間	なし	医師において感染の恐れがないと認められるまで(2回以上連続で便から菌が検出されなくなり、全身状態が良好であること)
急性出血性貧血	強い目の痛み、目の結膜(白目の部分)の充血、結膜下出血がみられる。また、目やに、角膜炎、视网膜炎もみられる。	エンテロウイルス	平均24時間又は2～3日	飛沫感染及び接触感染、経口(糞口)感染	ウイルス排出は呼吸器から1～2週間、便からは数週間～数か月	再発することもある	医師により感染の恐れがないと認められるまで
流行性角結膜炎(はやり目)	主な症状として、目が充血し目やにが出る。幼児の場合、眼に膿が張ることもある。片方の目で発症した後、もう一方の眼に感染することがある。	アデノウイルス	2～14日	飛沫感染、接触感染	発症後2週間(便中)1か月程度排泄されることもある)	3～4年間免疫持続	結膜炎の症状が消失するまで
慢性的髄膜炎(髄膜炎)	発熱、頭痛、意識障害、嘔吐であり、急速に重症化する場合がある。劇症例は紫斑を伴いコンコウ(髄膜炎)に陥り、致死率は10%、回復した場合でも10～20%にまひ等の後遺症が残る。	髄膜炎菌	4日以内(1～10日)	主に飛沫感染及び接触感染	有効な治療を開始して24時間経過するまで	再発することもある	医師により感染の恐れがないと認められるまで
RSウイルス感染症(1歳未満のみ)	呼吸器感染症(発熱、鼻汁、咳等)で、初感染した場合の症状が重く、特に6か月未満の乳児では重症な呼吸器症状を生じる。	RSウイルス	4～6日(2～8日)	主に飛沫感染及び接触感染(環境表面で長い時間生存できる)	通常3～8日間(乳児では3～4週間)	なし	呼吸器症状が消失し、全身状態が良くなるまで

医師の診察を受け指示に従い、保育施設での集団生活に適応できる状態に回復してから登園(所)する感染症

病名	症状	病原体	潜伏期間	感染経路	感染期間	免疫	自宅療養の目安
アライコラズス肺炎	主な症状は咳であり、肺炎を引き起こす。咳、発熱、頭痛等のかぜ症状がゆっくり進行し、特に咳は徐々に激しくなり数週間にとどまる。	肺炎アライコラズス	2～3週間(1～4週間)	主に飛沫感染	臨床症状発現時がピークで、その後4～6週間続く	再感染多い	発熱や激しい咳が治まるまで
ウイルス性胃炎(感染性胃腸炎、ロタウイルス、ノロウイルス等)	嘔気、嘔吐、下痢、発熱、合併症として、脱水、けいれん、脳症、肝炎、[ノロウイルス]学童、成人にも多くみられ、再感染も稀ではない。[ロタウイルス]下痢はしばしば白色便となる。	ロタウイルス、ノロウイルス、アデノウイルスなど	[ノロウイルス] 12～48時間 [ロタウイルス] 1～3日	経口(糞口)感染、接触感染、食品媒介感染(仕物の感染力は高く、乾燥した仕物から空気感染もある)	症状のある時期が主なウイルス排泄期間。ウイルスは便中3週間以上排出されることがある	なし	嘔吐・下痢等の症状が治まり、普段の食事が出来るようになるまで
溶連菌感染症	扁桃炎、伝染性膿痂しん(とびひ)、中耳炎、肺炎、化膿性関節炎、骨髄炎等の様々な症状を呈す。扁桃炎の症状としては、発熱やのどの痛み、腫れ、化膿、リンパ節炎が生じる。	溶血性レンサ球菌	(伝染性膿痂しん(とびひ)では2～10日)	飛沫感染及び接触感染	抗菌薬内服後24～48時間が経過するまで	再感染もあり	抗菌薬の内服後24～48時間が経過するまで
手足口病	水疱性の発疹が口腔粘膜及び四肢末端(手のひら、足裏、足甲)に現れる。口内炎がひどくて食事が取れない事がある。	コクサツキウイルス、CA16・A10・A6、エコーウイルス71等	3～6日	主に飛沫感染、接触感染及び経口感染	症状が出た最初の週の感染力が最も強い。回復後も飛沫や鼻汁からは1～2週間、便からは数週間～数か月、ウイルスが排出される	なし	発熱や口腔内の水疱、潰瘍の影響がなくなり、普段の食事がとれるようになるまで
伝染性紅斑(りんご病)	かぜ様症状の後、顔面、頬部に蝶のような形あるいは平手打ち様といわれる紅斑がみられる。四肢の発疹は網目状、レース状又は大理石紋様と称される。発疹は1～2週間続く。	ヒトパルボウイルスB19	4～14日(～21日)	主に飛沫感染	発疹が出現する前が最も感染力が強いが、発疹が出現する時期には感染力の危険性がなくなる	終生(再感染例も少数あり)	全身状態が良いこと
ヘルパンギーナ	発症初期には、高熱、のどの痛み等の症状がみられる。また、咽頭に赤い結膜しんがみられ、次に水泡(水ぶくれ)となり、まもなく潰瘍となる。高熱は数日続く。	主としてコクサツキウイルス	3～6日	主に飛沫感染、接触感染及び経口感染	飛沫や鼻汁からは1～2週間、便からは数週間～数か月間、ウイルスが排出される	なし	発熱や口腔内の水泡、潰瘍の影響がなくなり、普段の食事がとれるようになるまで
突発性発疹	3日間程度の高熱の後、解熱するとともに紅斑が出現し、数日で消えてなくなる。	ヒトヘルペスウイルス6B及び7	9～10日	ウイルスは多くの子ども、成人の唾液等に常時排出されており、移行抗体が消失する乳児期後半以降に保護者等の唾液等から感染すると考えられている	感染力は弱いが、発熱中は感染力が強い	2回罹患する小児もいる	解熱し、機嫌が良く全身状態が良好になるまで

保育施設で特に適切な対応が必要な感染症

病名	症状	病原体	潜伏期間	感染経路	感染期間	免疫	自宅療養の目安
A型肝炎	急激な発熱、全身倦怠感、食欲不振、悪心、嘔吐ではじまる。数日後に解熱するが、3～4日後に黄疸が出現する。	A型肝炎ウイルス	15～50日(平均28日)	糞口感染・食品媒介感染	発病前1～2週間が最も排泄量が多い	強い免疫力を獲得	主要症状がなくなるまで(肝機能が正常であること)
B型肝炎	0歳児が感染した場合、約9割がHBsキャリア(持続感染者)となり、その割合は年長児では低下するが、5歳児でも約1割がキャリア化する。乳幼児期の感染は無症状に経過することが多い。	B型肝炎ウイルス	急性肝炎では45～160日(平均90日)	血液や体液(唾液、涙、汗、尿等)を介して感染	HBs、HBe抗原陽性の期間を含めB型肝炎ウイルスが検出される期間	終生(一部はキャリア(持続感染者)となる)	急性肝炎の場合、症状が消失し、全身状態が良いこと(キャリア、慢性肝炎の場合は登園に制限はない)
伝染性膿痂しん(とびひ)	主な症状として、水泡(水ぶくれ)やびらん、痂皮(かさぶた)が、鼻周囲、四肢、体幹等の全身にみられる。患部を引っかくことで、数日から10日後に隣接する皮膚や離れた皮膚に新たに病変が生じる。	黄色ブドウ球菌、溶血性レンサ球菌	2～10日	血液等 → 皮下 → 汗腺	効果的治療開始後24時間が経過するまで	なし	病変部を外用薬で処置し、浸出液がしみ出ないようガーゼ等で覆っていること

